（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	Kritdikorn Wongswangpanich
論文題目	Sick Kingdom: The Role and Politics of Thai Health Care in the Domination of Bhumibol's Narrative （病める王国 ―タイ王党派の物語りの政治―）		

（論文内容の要旨）

タイの現代政治は国王を中心として展開してきた。この政治体制を支える要因として重要なのは、プーミポン国王(在位1946～2016年)を「お父さん」として崇敬の念と親近感を抱くように誘う物語りであった。この物語りに感化・教化されて、体制を支える大衆基盤となってきた人々がいる。彼らは、2006年以後非民主的な政権交代を支持する発言や行動を繰り返すようになって、民主政治支持者からサリム(salim)と呼ばれた。どちらかといえば高学歴の富裕層が多いサリムが、総選挙を拒否し、クーデタを歓迎するのはなぜか。サリムは、世界基準に照らし合わせると非合理的ながら、当人たちは合理的と自負している。本論文は、サリムの合理性を理解することを目的としている。

本論文は、歴史を4つの時期に分けて考察している。第一期には、ラーマ4世（在位1851-1868）が即位前に27年間僧籍にあるうちにパーリ語経典への回帰を主張し、タムマユット派を興した。王は少数派の同派を仏教界の中心に位置づけて、君主制、仏教、科学的な合理性を結びつけるタイの物語構造を生み出した。

第二期は2つの時期に分かれる。前半には、冷戦下での国王、軍隊、そしてアメリカの協調関係が、「お父さんから」という物語と「サリム原理主義」を生み出した。国王は医療団の派遣やダムの建設などの物質的な利益を提供し、慈悲の施しへの感謝の念を民衆に抱かせた。

後半は、1970年代に始まった。医学界の大物プラウェートが、改革派仏教僧の教えを近代科学の文脈に位置づけて全国へ広めた。その過程で、民主主義や科学的知識は仏教的な価値へと翻案された。国王をモデルとした無我の「善人政治」（道徳的な人物による支配）を称揚し、「お父さんのように」行動するよう国民に指南した。これは教義の政治であり、「進歩的サリム」という新しいタイプが生まれた。サリム原理主義が「人物崇拝」ならば、進歩的サリムは「教義崇拝」であった。

第三期は1990年代から2010年までであり、プーミポン国王が全国に勢威を及ぼした。

プーミポンの物語りには、誰もが語り部になれるという強みがあった。進歩派であれば、無我という国王の教義に従えばよい。原理主義であれば、国王の慈悲に報いる善行をすればよい。上からの圧力がなくても、「お父さんのために」皆が勝手に語ってくれるという段階であった。しかし2000年代に入ると、タックシンという挑戦者が登場した。物質的な恩恵の提供では、効率性と民主的正当性でタックシンが上回り、プーミポンの物語りに打撃を与えた。とりわけ国民皆保健医療制度は衝撃が大きかった。タックシンは2006年のクーデタで失脚させられたが、その後も国政選挙で勝利を続けた。

そこでプーミポンを他のものに置き換えようと試みる第四期が始まった。問題を解決するために「お父さんの代替」が試みられ、王党派は、プーミポン国王に替わるものとして、プラウェートが発案した「プラチャーラット政策」を採用した。政府が企業と協力して物質的な利益を庶民に提供するこの政策は、2019年総選挙で王党派の政党の政権獲得に寄与した。しかし、2016年に即位した新国王は無我とはほど遠い人物であった。新未来党（FFP）が、進歩派サリムが求める善人政治の教義に合致する存在として浮上し、タックシンを封じ込めようとする選挙制度の助けも受けて、第3党になった。サリムの一部を奪い取り、民主主義を重視するFFPは、脅威と見なされ、2020年に解党処分を受けた。この処分は、若者と進歩派サリムの反発を招いて、民衆の波状デモを引き起こした。これはプーミポンの物語りに突きつけられたもっとも厳しい挑戦であった。